

# 平成 30 年度 入学者選抜試験問題

## 国 語

実施日時：平成 30 年 1 月 18 日（木） 9：00～9：50

\* 下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

### 〈注意事項〉

#### — 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記の 2 つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2 項目のすべてに記入またはマークする。
  - ・ 受験番号欄 上段に受験番号を記入し、下欄にマークする。
  - ・ 氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を記入する。

#### — 開始後 —

1. 問題は 2 ページから 17 ページまでの各ページに印刷されており、第 1 問、第 2 問の 2 題で構成されている。  
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

3
---

と表示のある問いに対して 2 と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号 3 の解答欄③をマークする。

#### 〈例〉

1	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

3. マークする際は HB の鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後 30 分間および試験終了 5 分前は退出できない。

受 験 番 号

--	--	--	--	--	--



(問題は次のページから始まる)

## 第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

\*第一の消費社会から第四の消費社会までの国民の意識の大きな流れを概観すると、「national（国家重視）→ family（家族重視、家族と一体の会社重視）→ individual（個人重視）→ social（社会重視）」という大きな変化があったと言える。

第三の消費社会は、「高度消費社会」とも言われる時代であり、強い日本経済をベースにして、円高、バブルが起こり、日本人が戦後ずっと追い求めてきた欧米的な消費生活、物質的な豊かさが、少なくとも表面的にはほぼ完全に、日本にいながらにして手に入る時代が実現した。（a）、カクイツ的な大量消費商品ではなく、もっと自分らしい、自分の感性に合った商品を選択する自由が拡大した。

（b）、そのことは、新たな矛盾を生み出した。感性による個性化は人々を分断する傾向があったし、個性化の背景には階層化があったので、人々をさらに分断し、孤立化させる傾向があったと言える。

また、高度消費社会は過剰な物質主義を蔓延させ、一九七〇年代に予兆が見られたエコロジー意識、省エネ意識などを忘れさせ、八〇年代においてすら一時期は盛り上がりかけた反原発の動きをも（甲）させたのである。

第三の消費社会がもたらした、<sup>A</sup>こうした矛盾を解決する方向に第四の消費社会は動く。（c）、あまりに個人化、孤立化した社会よりも、個人間のつながりが自然に生まれる社会を目指そうとするのである。

社会（society）の語源はラテン語の（socius）であり、それはまさに「仲間、つながり」を意味する。にもかかわらず、資本主義化、消費社会化、私生活主義化、個人化などが進みすぎると、人は人同士のつながりを意識しにくくなる。社会の中にいるのに、つながりを感じられないという奇妙な矛盾が生じたのである。その矛盾を解消する方向に第四の消費社会は動こうとしているのである。

したがって、第四の消費社会では、自分の満足を最大化することを優先するという意味での利己主義ではなく、他者の満足をともに考慮するという意味での利他主義、あるいは他者、社会に対して何らかの貢献をしようという意識が広がる。その意味で社会志向と言ってもよい。

物質的な豊かさは、物を私有することで享受できる。<sup>(イ)</sup>キユウキヨク的には物を独占することで満足度が上昇することもある。人よりも大きな物、高額な物、希少な物を持ったほうが満足する。それを見せびらかすこともでき

る。そうしたことをマーケティングの世界では「(乙)」と呼ぶ。

しかし、情報は物質とは違い、それを私有し、独占し、貯め込むだけでは意味をなさない。それを他者に伝え、他者と共有しないと、情報を持つていることによるこびを味わえないのである。金の延べ棒のように情報を積んでおいても、情報は価値を生まない。あるいは昔話に出てくる、土の中に埋められた大判小判を入れた壺はのように、情報をどこかに隠して貯め込んでいても、何もよろこびをもたらさないのである。

A 日常の些細ささいなことであっても、フェイスブックに書き込めば、みんなから「いいね」と言われる。見ず知らずの人からも「誕生日おめでとう」というメッセージが届く。

B だから、情報化が進むと、人々は、どういう情報を持っているかを自慢するという以上に、情報を交換すること自体によるこびを見出そうとする。

C これが情報と物質の興味深い相違である。

D 広い意味で利他的な行動が簡単にできるようになったのである。

こうした利他志向あるいは社会志向の広がりには、内閣府の「社会意識に関する世論調査」において、一九八六年以来、ほぼ一貫して社会に貢献したいと「思っている」人が増えていることから明らかである。

また、「X」という考え方も二〇〇五年以降増え始めている。まさに第四の消費社会の始まりと同時である。

「これからは、国民や社会のことにもっと目を向けるべきだ」という社会志向的な回答も、バブル末期から増え始め、二〇〇五年を過ぎると過半数に達してきている。

また、NPOの数も二〇〇〇年以来、一二年で四万を超えており、社会的に貢献できる活動に関心を持つ一般市民が増えていることを裏付けている。

こうした利己主義から利他主義への変化は、私有主義からシェア志向への変化だとも言える。自分専用の私物を増やすことに幸福を感じるだけの私有主義、私生活主義、マイホーム主義ではなく、第四の消費社会では、他者とのつながりをつくりだすこと自体によるこびを見出すシェア志向の価値観、行動が広がっていく。このシェア志向

の価値観、行動こそが、第四の消費社会における消費の基礎となっていくものである。

シェア志向の消費者は、一つの物を複数の人で共有する、共同利用する、所有せずにレンタルで済ませる、あるいは中古をリサイクル、リユースするという行動をとるので、必然的にエコロジー志向である。無駄を省くシンプル志向のライフスタイルを拡大する。

また、エコでシンプルな暮らしを実現しようとする、エアコンを使わずにすだれを使ったり、打ち水をしたりするなど、伝統的な日本の生活様式を見直すことになるので、日本志向を拡大することにつながる。

そして、日本志向が強まると、物質的な豊かさを「シヨウチヨウする都会的な暮らしよりも、自然と親しみながら暮らす豊かさを求めることにもつながるので、地方志向が強まる。

地方志向の強まりとも関連するが、シェア志向は分散志向である。それは、大都市集中、中央集権、ワンマン経営などの集中型のスタイルから、地方分散、地方分権、ネットワーク型経営などへの変化とも並行している。また、シェア志向の消費者は、人と人とのコミュニケーション、できれば顔の見える直接的な人間関係を重視する。

さらに言えば、これはまだかなり先端的な現象であろうが、お金を介さない人間関係をいかにつくるかという点に関心が向かう予兆が見える。つまり、「金から人へ」という動きが始まっていると言える。

情報の交換からよるこびが得られるようになると、たしかに人は物を買わなくなるだろう。物を買って得られる満足は、多くの場合、買った瞬間が最大であり、時間の経過と共に減っていく。それはどうしてもイチ<sup>(4)</sup>マツの空しさを伴う。

しかし情報を交換することによる満足は、交換した瞬間が最大で、その後低減するわけではない。楽しさは交換によつて増幅され、継続しうるのである。

こうした情報交換による楽しみをおぼえた消費者は、物を買うときの判断基準も変わってくるであろう。買った瞬間に最大で、次第に低減していく満足感ではなく、買ったあともずっと満足感が維持される物、あるいは、むしろ時間が経てば経つほど満足感が増していく物を人は買うようになるだろう。あるいは、時間が経つことでえもいわれぬ味が出ている物を好むようになるだろう。事実、\*「シンプル族」は、昭和初期につくられた中古家具だの、伝統的な工芸品、民芸品だの、古民家だのを好むのである。

また、情報化がシェア志向を強めるのは、インターネットを通じて情報自体のシェアが簡単になり、それによつ

て物のシェア（交換、中古品売買など）も簡単になったからである。情報化がシェア志向拡大のインフラとなったのである。

シェア志向の価値観は、他者との差別化を求めるものではない。むしろ、他者とのつながりを求めるものである。人と違う自分を見せつける、見せびらかすのではなく、人との共通性を見つけて、そこを媒介にあらたなつながりをつくろうとするのである。

だからといってシェア志向は、同質化を求めるものでもない。シェア志向の価値観が広がった前提は、個人主義的な価値観がそもそも広まっていることにある。現代のシェアは、みんなが同じだけ分配されるべきであるという、集団主義的、社会主義的なシェアではないし、みんなが同じようになるべきだという同質化志向ではない。むしろ、みんなが違うのは当たり前であり、それをお互いに尊重し合うという個人主義こそがシェア志向の大前提になっている。

こうしたシェア志向、あるいは利他志向の前提が、物質的な豊かさにあることは言うまでもない。ひとりひとりが、<sup>(\*)</sup>ダイキユウ消費財を一人一台かそれ以上持ち、衣料品や雑貨ならばありあまるほど持っている、そういう過剰な消費社会が前提にあるからこそ、自分が使わない物は必要な人に使ってもらおう、役立ててもらおうという行為が可能になる。

（出典 三浦展『第四の消費 つながりを生み出す社会へ』より）

※本文は、出典の記述を一部省略している。

（注） \* 第一の消費社会から第四の消費社会まで：筆者は日本の消費社会を特徴に応じて分類し、二〇世紀初頭から第二次世界大戦前までを第一の消費社会、戦後から石油危機までの高度経済成長期を第二の消費社会、石油危機後から二〇〇四年までを第三の消費社会、二〇〇五年から二〇三四年までを第四の消費社会、としてしている。

\* 「シンプル族」：環境にやさしくシンプルな暮らしを求める人々。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(ア)	カク	イツ							
(イ)	キユウ	キヨク							
(ウ)	シヨウ	チヨウ							
(エ)	イチ	マツ							
(オ)	タイ	キユウ							
	①	①	①	①	①	①	①	①	①
	対	松	性	急	画				
	②	②	②	②	②	②	②	②	②
	帯	末	称	吸	核				
	③	③	③	③	③	③	③	③	③
	耐	沫	象	及	角				
	④	④	④	④	④	④	④	④	④
	態	待	賞	究	客				
	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	体	抹	証	朽	格				

問二 本文中の( a )～( c )に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は( a ) 、( b ) 、( c )

- ① また
- ② もしくは
- ③ 例えば
- ④ しかし
- ⑤ すなわち



問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）

9、

（乙）

10

（甲）

① 雲散霧消

② 一網打尽

③ 本末転倒

④ 日進月歩

⑤ 付和雷同

（乙）

① 多様化

② 私物化

③ 合理化

④ 差別化

⑤ 高級化

問四

空欄

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

11

- ① 個人の利益をすべて国民全体の利益とすべきだ
- ② 個人の利益よりも国民全体の利益を大切にすべきだ
- ③ 国民全体の利益と同じくらい個人の利益を大切にすべきだ
- ④ 国民全体の利益よりも個人の利益を大切にすべきだ
- ⑤ 個人や国民全体の利益という考え方自体を変えるべきだ

問五 本文  の中のA～Dの文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 12

- ① A↓B↓D↓C
- ② A↓D↓B↓C
- ③ C↓D↓B↓A
- ④ C↓B↓A↓D
- ⑤ D↓B↓A↓C

問六 傍線部A「こうした矛盾」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 13

- ① 自分らしい個性のある商品を選択する自由が拡大したことで、かえってエコロジ―意識や省エネ意識が芽生えたこと。
- ② 表面的な満足感が得られるようになった一方で、満足したがゆえのある種のむなしさを人々が実感するようになったということ。
- ③ 物質的な豊かさや個人重視の消費生活が手に入ったにもかかわらず、個性化や階層化によって人々の孤立化が促進されたこと。
- ④ 社会志向の傾向が強まり個人への富の集中を防ぐ一方で、高度消費社会のもとで過剰な物質主義が蔓延したこと。
- ⑤ 日本人が欧米的な消費生活や物質的な豊かさを手に入れることができたにもかかわらず、精神的な部分で満たされない状況に陥ったこと。

問七 傍線部B「必然的にエコロジー志向である」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 14

- ① 物を一人で所有せず複数の人で共有したり、レンタルや中古を利用したりするようになるから。
- ② 人とのコミュニケーションや物質的な豊かさでは満足できず、日本志向や地方志向が強まるから。
- ③ 物を買う時の判断基準が変化し、古いものほど価値を見出すようになるから。
- ④ シンプルな暮らしを理想とし、物を買わないということから満足を得るようになるから。
- ⑤ 社会重視の消費社会においては、消費するということが自体に高い価値を置いていないから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 15

- ① 資本主義化や消費社会化、私生活主義化、個人化などが進行しすぎて人と人のつながりが途絶えてしまったことから、第四の消費社会ではつながりを取り戻そうとする欲が高まっている。
- ② 物質は私有し独占した時点で豊かさを実感し満足を得ることができるが、情報は私有し独占しただけでは満足を得ることはできず、その情報の質や希少さが満足度をはかるバロメーターとなる。
- ③ 利他志向や社会志向の広がり、人々の社会貢献への関心度の高さと国民全体の同質化傾向に現れており、この志向の変化はシェア志向の価値観へとつながっている。
- ④ シェア志向の高まりは日本志向や地方志向の強まりを招き、シェア志向の消費者は他者のつながりや情報交換、個人主義の排除に価値を見出すようになっていく。
- ⑤ シェア志向の高まりによってシンプル志向の生活スタイルが拡大を見せているが、物質的な豊かさや過剰な消費社会が土台にあつてこそそのシェア志向・利他社会ともいえる。

## 第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

原生林を守ろうとか、人間の手が入っていない野生的な自然である「原生自然 (Wilderness)」を保護しようということがナイーヴな形で叫ばれたり、あるいは、その素晴らしさが語られることも多い。その<sup>(ア)</sup>アンモクの前提として、いつも原生自然は温かくわたしたちを育んでくれているか、少なくとも「脅威」の対象ではないと考えられている。(a)、日本においても奥山の山岳地域は修験道の修行の場であったことを想定してみればすぐ分かるように、原生自然は往々にして「恐い森」でもある。ただ、日本だけでなく、多くの地域において、恐い場所ではあるが、その中から不思議な力を体得してくるような「異界」としても認識されていた。

最近、先住民の自然観念や自然とのかかわりの作法が注目されていた。日本でも伝統的な技術や民俗の中に環境保全的な意味として「共生」の目的がもともと含まれていたのかどうかは、議論を呼ぶところである。確かに環境保全的な意味を持ったタブーなども存在してはいるが、それは、自然をなだめつつ、ある程度安定した継続<sup>A</sup>環境保全的な意味を持ったタブーなども存在してはいるが、それは、自然をなだめつつ、ある程度安定した継続的な生業<sup>なりわい</sup>を続けていくための智慧<sup>ちえ</sup>であったとは言っても、「環境保全」的な視点は必ずしも明白には存在しないように思われる。

(b)、日本においては、とくに高度経済成長期の時代になり、近代科学の恩恵の下に、自然を支配し、管理できるという考え方が浸透してきた結果、自然をなだめる必要がなくなれば、そのための「共生の民俗」は単なるタブーとか迷信として退けられていく。そして近代的生活の浸透とともに省みられなくなっていった。

そのように考えていくと、現在のような環境危機が生じた大きな一つの原因は、人間が自分たちの技術、とくに科学技術を背景にして、自然をある程度コントロールできる(という幻想を持つ)ように考えるようになってきたことにあるのではないか。人間と自然のかかわりのありかたの総体を崩しても、また、自然をなだめなくても、生業を維持できるようになったという幻想をわたしたちは持つてしまったのである。

自然の脅威を克服するのが科学の勝利として称揚された時期があったが、まさにそのことによって、自然をなだめるための智慧は必要としなくなってきた。少なくとも必要ないと思われるようになった。実際、それまでの伝統的な因習やタブーは、現在「環境倫理思想」として再評価されるものも含めて、「非科学的」であるとして退けら

れてきたが、それは、そのような智恵の体系に支えられた自然とのかかわりのあり方がなくなっても、近代科学の力によって支配できるということが<sup>(1)</sup>ガニイ<sup>(1)</sup>されていたのである。

(1) 一般に、自然保護と人間の営みは対立的な形で語られることが多い。実際は単純ではないにせよ、地域の振興発展と自然保護とはおおむね衝突すると考えられている。林道建設などの開発に「地元」の住民が反対する場合もなわけではないが、「地元」の人たちが開発を支持する一方で、都会の環境保護団体などのいわば「よそ者」の人たちが自然保護を提起し、「地元」の少数派の人たちを支援するという構図は一般的にみられる。

(2) ところが、(c)、篠原徹<sup>しのはらとむね</sup>の『海と山の自然民俗誌』(吉川弘文館、一九九五年)などの自然とのかかわりに関する民俗学の研究をいろいろと見てみると、とくに漁村や山村の人たちの自然とのかかわりあいの深さや自然観の豊かさには目を見張るものがある。そういう自然のことをいちばんよく知っているはずの人たちが新しい技術の採り入れに抵抗を示す場合も往々にしてあるが、その一方で、伝統技術を近代科学技術に置き換えたり、また対象の自然の改変に対して積極的であるのも、また彼らであつたりもする。それに対して自然保護を叫んでいる人たちの中には、非常に多様な人たちがいて一括はできないにしても、自然とのかかわりが希薄な都市生活をしている人たちが少なくない。

(3) もちろん、自然との密接な暮らしを開発によって奪われた人が、それに対して戦う場合もある。東南アジアの熱帯林の破壊によって一番犠牲を強いられ、またそれに対して闘っているのは、例えばサラワクに棲む<sup>す</sup>プナン族などの先住民である。また、都会に住んでいても、もともと豊かな自然の中で育ち、深くかかわってきた原風景が開発の中で<sup>(4)</sup>ソウシツ<sup>(4)</sup>していくことへの思いを「よそ者」として自然保護運動にかかわる原動力にする場合もある。他方で、もともと豊かな自然とのかかわりを持っていても、高度経済成長期を経て近代化が進んだ「地元」に住み、自然とのかかわりが希薄になった生活を営んでいる人たちもいる。<sup>B</sup>「地元」の人と「よそ者」との関係は簡単ではない。

(4)

とくに、開発に起因する利益と、その開発による自然破壊に起因する不都合をそれぞれ、誰が受けるかということとを考えると、人間の営みと自然との関係は単純ではないことがわかる。「人間が開発によって自然を破壊して、何らかの利益を享受しました」「それとともに、自然は破壊されて、それに起因して災害などが起こって不都合なことが起きました」「これは、人間の自然に対しての働きかけと、それに伴う人間への自然からのしっぺ返しです」などというような単純な図式では捉えられない。

(5)

みなまた 水俣病などの公害問題を見ても、その開発によってメリットを受けるグループと、その開発によってデメリットを受けるグループはおおむね分かれる場合が多い。人間を（甲）に見立てて、人間と自然との二項対立的な関係で環境問題を捉えるのは間違いなのである。これを、環境社会学の方では、受益圏と受苦圏の分離として分析している（海野道郎「環境破壊の社会的メカニズム」飯島伸子編『環境社会学』有斐閣、一九九四年など）。

自然へのかかわりの深さと、それと一見相反するような X の関係は単純ではない。しかし、単純ではないにせよ、少なくとも、人間が自然を積極的に利用しようとしてきたいろいろな歴史を踏まえて、そういう人間の営みや思いをどう考えるかということを考慮に入れないで、自然との「共生」は語れない。

環境思想の主要な流れにおいては、人間中心主義をダツキヤクする方向に、大きな転換を遂げている。人間以外の生物に眼差しを向けた生命中心主義であれ、生態系全体に向かう生態系中心主義であれ、今までの人間中心主義的あり方をいかにして克服できるかという問題が大きなテーマになってきた。

しかし、そのような思想において、これまで述べてきた人間の営みは十分に位置づけられないように思われる。人間の営みを重視し、それを中心的なものとして考慮に入れて環境問題を考えるのは人間中心主義というのでは（乙）すぎるのではないだろうか。

実際、とくにリオ・デ・ジャネイロで開催された国連環境開発会議、いわゆる地球サミット以来、先住民の権利や生活と環境問題、さらに彼らの自然観などが注目されて、「環境的公正」が世界的にもクローズアップされてきた。つまり、国際的な地球環境問題のレベルでも、従来のような人間中心主義VS人間非中心主義という図式から、環境問題における人間社会の問題へ、また、人間の営みのあり方に関する問題へと、緩やかではあるが、全体的な関心の重心が移ってきている。その意味で、世界的な視野からみても、この「共生」の問題を人間の営みという視点か

らサイ<sup>(オ)</sup>コウ<sup>(イ)</sup>していくことが必要であろう。

(出典 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす——環境倫理とネットワーク』より)

※本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分の漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 16、(イ) 17、(ウ) 18、(エ) 19、(オ) 20

(ア)	ア ン モク	①	案	③	按	④	暗	⑤	闇		
(イ)	ガ ン イ	①	元	②	含	③	眼	④	岩	⑤	巖
(ウ)	ソ ウ シツ	①	想	②	喪	③	創	④	相	⑤	争
(エ)	ダ ツ キ ヤク	①	却	②	客	③	郭	④	格	⑤	脚
(オ)	サイ コウ	①	校	②	行	③	考	④	高	⑤	光

問二 空欄( a )～( c )に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は( a ) 21、( b ) 22、( c ) 23

- ① 例えば
- ② それゆえ
- ③ しかし
- ④ さらに
- ⑤ ところで

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）24、（乙）25

（甲）

- ① 一枚岩
- ② 大黒柱
- ③ 一筋縄
- ④ 両刃の剣
- ⑤ 対抗馬

（乙）

- ① 過剰
- ② 不完全
- ③ 楽観
- ④ 難解
- ⑤ 単純

問四 空欄Xに入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は26

- ① 自然に強く憧れる思い
- ② 自然の消滅への思い
- ③ 自然の改変への思い
- ④ 自然からの支配を望む思い
- ⑤ 自然の支配と従属への思い



問五 次の文章は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。  
解答番号は 27

自然とのかかわりが深いはずの人たちが開発を叫び、むしろ、かかわりが少ない人たちが自然保護を叫ぶ。ここでもまた、逆説的な構図がある。

- ① (1)      ② (2)      ③ (3)      ④ (4)      ⑤ (5)

問六 傍線部A「環境保全的な意味を持ったタブーなども存在してはいる」とあるが、現在これらのタブーなどが退けられている理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 28

- ① 伝統的な技術や民俗の中に環境保全的なものを見出しそれから学ぶべきであると考えられている一方で、これらの因習やタブーに環境保全的な意味での「共生」の目的があつたかどうか疑問視されているから。
- ② 人間が科学技術によって自然をある程度コントロールできると考えるようになり、自然をなだめつつ安定した生業を続けるための智慧である非科学的な因習やタブーを必要であると考えなくなったから。
- ③ 日本では高度経済成長期より近代科学の下に自然を支配し管理できるという考え方が浸透し、現在ではさらに進歩した科学技術によって自然を十分にコントロールすることが可能となったから。
- ④ 自然の脅威を克服できていなかった時代には因習やタブーによって環境保全を図っていたが、科学技術が発展した現在では因習やタブーは「環境倫理思想」の分野でしか評価されていないから。
- ⑤ 自然と人間とのかかわりが時代の移り変わりとともに変貌していった過程で、人間は自然をなだめなくとも生業を維持できるようになったと慢心するようになっていったから。

問七 傍線部B『地元』の人と『よそ者』との関係は簡単ではない」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 29

- ① 自然との暮らしを開発によって奪われた人が抵抗する場合や、地元出身で現在都会に住んでいる人が自然保護活動に参加している場合もあり、単純に「地元」と「よそ者」と区別できないということ。
- ② 同じ「地元」の人であっても、開発によって利益を得る人と、開発による自然破壊によって不利益を被る人がおり、「地元」の人とひとくくりに語るわけにはいかないということ。
- ③ 自然とのかかわりが深いはずの人が開発を訴えたり、かかわりの少ない人たちが自然保護を訴えたりして、一概に「地元」の人と「よそ者」が対立しているとはいえないということ。
- ④ 豊かな自然とのかかわりをもつ都会の人が一様に「よそ者」と呼ばれる一方で、開発に熱心な地元の人でも「地元」の人と呼ばれる構図ができてきていること。
- ⑤ 『よそ者』の人が自然を破壊して利益を享受した「自然を破壊された『地元』の人が災害に苦しんでいる」など、現在住んでいる地域のイメージだけで捉えられないこともあるということ。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 30

- ① 現在では環境保全活動によって人間の手が加えられ「脅威」が取り除かれた原生自然であるが、かつては「異界」として認識されていたように、人間にとって必ずしも安全といえる場所ではなかった。
- ② 「地元」の人たちが地域の復興発展を願って開発を支持する一方で、都会に住む「よそ者」の人たちが自然保護を掲げ、開発に反対する一部の「地元」の人たちを支援するという構図は珍しいものではない。
- ③ 漁村や山村にすむ自然とのかかわりが深い、豊かな自然観を持つ人たちが、伝統技術を近代科学技術に置き換えたりすることで、積極的に自然の保護を推進している。
- ④ 開発で利益を得る人と、開発による自然破壊で不都合を受ける人に分かれるため、人間と自然との二者の対立という形で環境問題を捉えるのは間違いであり、三者関係に捉え直す必要がある。
- ⑤ 国際的な地球環境問題においては、かつては人間中心主義と、自然や生態系全体を中心とする非人間中心主義の対立と捉えられていたが、現在は人間同士の対立と認識されるようになった。